



TITLE:

静脩 Vol. 7 No. 5 (1971.1) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 7 No. 5 (1971.1) [全文]. 静脩 1971, 7(5)

ISSUE DATE:

1971-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65940>

RIGHT:



『大学改革にさいし図書館にのぞむ』を読んで

——“図書館員の声”特集号——

はじめに

本号には、前2号の“利用者の声”にたいする“図書館員の声”を集めました。これらはそれぞれ個人の立場にたったの自由な発言であって、“利用者の声”に触発されて、図書館員たちが日ごろもっとも思っているものが、言葉になったとも言えましょう。図書館の業務に携わっている館員が、現在どう考え何を望んでいるかを、よく汲み取ってくださるようお願いします。

数理解析研究所 須々木信子

「利用者の声」を読み感じたことは、利用者の要求の図書館行政に反映されるルートが確立されていないということである。大学図書館は、図書館員と利用者である教官、学生との間の有機的結合の上にその機能を効果的に発揮するものであると考えるが、現在、京都大学では両者の意見交換の場は十分保障されていない。図書館改革は、両者の意見交換の場を確立することから始まるのではなからうか。利用者との自由な討論の中で、具体的な問題、たとえば整理、複写業務の迅速化と利用システムの簡略化。書庫、図書費の問題。図書業務の機械化、コンピューター導入にともなう諸問題等を大学の自治、学問の自由を守る立場から、十分、検討する必要があるのではなからうか。

大学図書館が、真理探求のための資料を提供する場であり、そこに働く職員は、利用者のよき協力者であるとするならば、教官・学生・職員の構成する図書委員会の設置とその民主的運営こそ改革への道に通じる第一歩なのではなからうか。

最近、コンピューター、情報化社会という言葉が頻繁に耳にできるようになったがこれは大学図書館においても例外ではなく、すでに京都大学においてもコンピューター導入の準備は着々と進められている。しかし、全体的には図書館へのコンピューター導入がどういう意味を持つのか、あるいは導入後、利用システム、仕事内容がどのように変化するのか、利用者、職員とも十分理解していない。また、利用者に対し質の高いレファレンスサービスをするためにも図書館員の研修は是非必要なのであるが、それもあまり保障されていない。大学の語学講座等、職員にもひらかれてよいのではなからうか。

そういった図書館員側の要求と、利用者の要求などを自由に討論する場をつくっていかねばならない。それには、それを現実化する制度を確立しなくてはならない。そういった意味でよき図書館運営は、大学の民主的改革の上にしか考えられないのである。

附属図書館 門 田 泰 典

大学図書館の改善、改革の問題を歴史的にみれば、戦後、新制大学発足前後から、大学図書館基準、国立大学図書館改善要項、司書職制度、大学図書館の近代化の運動、等主として法制面での運動が展開され、一定の成果を収めてきたが、今日なお、大学図書館の状態は一向に好転する様子がみられない。過去20年間に大学図書館は発展的成長を遂げたというよりも、非体系的・果積的衰退に至ったと思える現状である。

この間、図書館の使命、役割、機能、あり方等は、法制面で明文化され、外形は整えられたが、その実質化の面では、整理、サービスの両面で、質よりも量をこなす図書館活動を継続し、その実質は、空洞化し、核のない把えどころのない組織体となってきたと考える。

このような事態に至らしめた原因を図書館行政の貧困に求め、さらに、思考・行動を開始することも重要なことであるが、これと同等に重要と思われる問題についての反省が先行しなければならないと考える。

それは、現場を担当する専門的図書館員として、整理・サービス両面で、如何なる行政的・財政的条件におかれても、われわれの専門的業務の実質だけは、利用者に対して、これを一貫して、護り通せるような形での専門的業務の展開、確立に努めてきたかという問題である。

この疑問を発するとき、われわれの取りかからなければならない事柄は数多くあるように思う。その中でも特に、利用者の潜在的、顕在的要求との関係において、われわれの図書館内部の実体を、ダイナミックに、科学的に把握しこれを再構成することが最も緊急を要するものであると考える。われわれの出力する諸サービスが、どのように利用者の要求と結びついているか、その量は、その質はどうか、新たに必要なものは、また、不要な部分は何かを明確にしてゆくことが必要である。

このような手続を経て、今日の大学図書館の貧困の責任について、大学社会全体の部分と、図書館側の部分を明確にしてゆくことが正しい大学図書館の実質化、また専門的業務の実質化への道ではないかと考える。

文 学 部 山 田 忠 彦

現代のように細分化された学問に対応するために大学図書館の業務内容も複雑化し、専門化せざるを得ない。図書館職員も既存の知識だけでなく、社会変化に応じた新しい知識・教養が要求されてくる。技術的なものだけでなく図書館の真の役割は何か、館員はなにをなすべきか等々の理論的なものもぜひ各自が持ち、生かしていかなければならない。そこで館員としての研修はいつの時にも必要となってくるが、京大の現状と照らし合わせて内部研修の確立について書いてみたい。

勤務時間内に目録法とか語学の勉強をしたい、書誌学的なものを学びたい、図書館学の理論を身につけたい、図書館員のあり方について考えたい等々、すべて業務に役立てたいということを前提にして図書館員は希望を持っている。しかし京大では仕事量の増大・人員不足等が重なり、日常業務に追われ、また、職員が自主的に学習する権利が確立されていないため、館員の希望にもとづく自主的研修がかなえられているのはほんの一部分でしかない。そのために研修は時間外に館員の自己負担（経費をも含めて）で行なわれており、大学図書館としては全く消極的である。東大農学部図書館では学生の授業を館員各自でカリキュラムを組み聴講でき、また、特殊語学は特別に講習が行なわれており、他大学数校でもそれに似た

制度があると聞く。図書館員が学問的知識を身につけて、それを業務に還元するという意味において、わが京大でもぜひこの方法の有効性が認識され、明確に位置づけられることを要望したい。

次にわれわれ館員が自からの所属する館のみならず、全般的な図書館問題について研修し討論する機会がもてるようにぜひ全学的に保障されなければならない。現状では有志が自主的に勤務後夜遅くまで討議し、図書館理論を身につけようとしているが、全館員が話し合い理論を実践に結びつけていく必要がある。図書館員のサラリーマン化がいわれて久しいが、館員自身の側にも自からの職業を研究しようという意欲の稀薄な例があるのは残念である。しかし、改善すべきところは改善し、図書館運営を民主的にすすめていく、という点についての姿勢が大学側にあまりみられないのではなかろうか。もちろん研修討論は自由な立場ででき、どこからも圧力のかからないものであることが最低条件である。業務の兼ね合いもあるがせめて1カ月1日館内整理、館員会議を目的とした休館日をもうけ、その中で館員全員が研修時間を持てるように、というのは虫のよすぎる願いであらうか。

利用者に対する奉仕がよりの確に迅速に行なわれるためにもその裏付となる自主的内部研修が1日も早く保障されるように要望しペンを置きたい。

経済学部 調査資料室 桜田 忠 衛

図書関係の業務に従事している者として、毎日の仕事のなかで感じていることを二・三あげたい。この雑文で図書職員の実情に御理解いただければ幸いである。私は経済学部にも所属しているので具体的には経済学部での現状をあげるが、他の学部においてもそんなに大きく変わるところはないだろう。

まず、私の考える「図書職員」像を描いてみたい。最近、学問は各分野で専門化し、細分化がすすんでいる。このことは図書館の分野においても新しい領域の拡大を強制する。経済関係の図書でも、特に近代経済学といわれる分野においては私たちがきいたこともないような言葉がひんぱんに出てくる。私たち図書職員がこれら学問の専門化とそれにとまなう細分化に正しく対処していくのには、なによりも研修が必要であり、専門的知識を身につけることが要請されてくる。図書・資料等の文献情報部門を担当して、大学内における共同研究にも積極的に参加しようとするならば、研修や専門的知識は一層必要となるだろう。（共同研究へのドキュメンタリストの参加の問題に関しては、細川元雄「特殊文献目録編集に関する問題点——ヒルファディング文献目録編集に関連して——」『経済資料研究』No. 3, 1970, 9に展開されている。）私は大学における共同研究体制こそが本来あるべき研究体制と思うので、そこから導き出される図書系職員の本来あるべき姿も以上のように共同研究体制への積極的参加に求められる。

ここで現実を目をむけてみよう。そこでは図書職員は決して共同研究の一部門を担当するというような精神的労働には従事していない。夏はむし暑く、冬は寒い、暗いほこりばい書庫の中で右往左往しているのである。また経済学部では書庫が6カ所に散在しているためそれに要する労力・時間も相当なものである。加えて仕事量は増大する一方なのに（貸出冊数だけをとっても昭36に1日平均17.1冊だったのが昭43には1日平均30.8冊になっている）それに比例しての人員は増えない。また、図書や資料も他の物品同様に「物品管理法」の適用をうけるため、図書事務が繁雑化している。このことも図書・資料の整理において大きな障害となっている。

以上のように京大における図書職員というのは決して私たちが望むようなかたちでの精神的労働者ではなくして、最も過酷な条件のもとにおかれた肉体的労働者なのだ。定員外職員

が図書系に多いというのはこのことを端的に示していると思う。

理学部地質学・鉱物学教室 今井敏子

先に掲載された利用者の声に対し図書館員として考えるということですが、利用者の声を全く否定した考えは出て来ませんし、むしろ利用者の声に私達がどう応えるのかということが改革の一部につながるものと考えます。唯、一方的な利用者の押しつけのみの声は合理化につながるものとして反撥を感じます。

理・工学部のように各教室毎に図書室のあるところでは、今進められようとしている本館の構想からは全く隔離されたところでもあります。特に理学部の現状をみても、4年前の「静脩」3巻1号(1966年)の東西南北・理学部の教室図書室の紹介が掲載されているのを読み返してみても、今は外見的には建物が新しくなり、閲覧室が明るくなった程度で、職員の数も数学教室を除いては全然増えておらず、複写の業務が増えただけ労働強化を強いられている現状です。

昨年来の紛争後、理学部では教育改革が行なわれ今までの3・4回生の教室への分属制度はなくなり、数学系・物理系・生物系の三系列になり、学生はそれぞれの教官群に登録するのみで、講義の選択は自由、またどこの図書も利用できるということになりましたが、現在の各教室での蔵書は内容的には教官のための研究用図書が多く、学生のための教育用図書が少ないことが問題になっています。せめて学生用の図書館が一つ理学部にあってもよいのではないかという希望は出ているが、実現のためには、基準面積、予算、北部分館計画等困難が多々あります。年度当初にせめて登録事務、学部内の目録室等の計画は少し話し合われましたが、立消えになっています。今、全国的に問題になっているコンピューター等機械化も学部内では遠い話で、そのことが合理化につながるのだという討議も頭の上を素通りしてゆくのみで、黙々と手工芸家が自分の技術を磨くようにこつこつと仕事をしているのが私達の現状で、そこからの改革案を考えると、予算・人員での行きづまりの壁の厚さをつくづく考えさせられます。

教養部 井狩らく子

“図書館は研究水準のバロメーターである”と、ある大学の図書館職員になったとき教えられた。まさに“利用者の声”特集号によれば、多くの研究者・学生が異口同音に情報化時代にふさわしい図書館を要求されているのは当然である。

当教養部の現状をみる時、諸氏の要求には遠くおよばない。図書室は研究、教育、学習の目的を遂行するに必要な基本的な機関であり、大学図書館設置規準でも、最低の規準が示されているが、70余年を経た建物にはそれさえも整備され得ない。例えば5,000余人の学生数に対し200席たらずの閲覧席。さらに閲覧室のスペースの関係から開架方式さえ採用され得ない状態である。(単なる1例である)

一方財政公開の前進によって予算は上積みされた。必然的に研究、学生用図書は増加した。それにたいし職員数は15年間据えおかれ、今なお増員要求が受け入れられない現状では、教官ことに学生にその不便がはねかえっている。

図書館が奉仕機関であるから、あるいは世界情勢に即応して、ということで直ちに機械化を受入れるには利用者からの提言にもあるように問題がありそうである。大学図書館職員は自らの労働を学習し、あらゆる側面から機械化の問題を検討していかなければならない。

 議 会

図 書 館 商 議 会 専 門 委 員 会

第9回 昭和45年10月21日 第10回 昭和45年11月25日
 第11回 昭和45年12月23日

〔第9回〕 テーマ：附属図書館と保存図書館

昭和45年10月末現在で、京都大学の蔵書数は290万冊を越える。それに対して、本学における書庫の収容可能数（書架棚板の長さ90cmに図書25冊を収容可能として計算）は、286万冊余で、全体としては、すでに4万冊近い未収容図書があることになっている。このような、収容可能数の赤字・黒字は、部局によって、それぞれ違いがあるが、大学全体として、早急に保存図書館の計画をすすめる必要がある。

その場合、保存図書館を別個に建てるか、それとも、中央館を新築して、現在の中央館の建物を保存図書館として使用するかについて審議が行なわれた。

〔第10・11回〕 テーマ：学内における図書館長の地位

これまで、附属図書館や部局図書館のあり方、大学全体としての図書館システムの問題等の討議が続けてきたが、今回からは、図書館長の問題の討議に入ることになった。

問題点としては、図書館長と評議会の関係、図書館長と商議会との関係、さらには、商議会と総長および評議会との関係等を、どのように考えるべきかについて審議された。

とくに、商議会のあり方については、他大学の事例をみても、かなりまちまちであり、また、館長を自動的に評議員とすべきかどうかについても、評議会のあり方とも関連して、各大学ごとに取扱い方が違っている。京都大学の図書館行政という観点から考えた場合、どうあるべきかについて、つき込んだ意見がいろいろ出されたが、行政組織等に関する学内の専門家の意見も聞き、さらに審議を続けることになった。

昭 和 4 5 年 度 全 国 図 書 館 大 会

＜とき：昭和45年11月11日（水）～13日（金） ところ：広島市＞

本年は図書館法施行20周年でもあり、「協力体制の確立」と「社会との結びつきを強めよう」という大会スローガンのもとに、全国各地の図書館人、および社会教育関係者、図書館利用者を集めて、盛大な幕開けとなった。

初日は開会式や記念講演（升田幸三氏：人生雑感）があり、2日目は、館種別、問題別の15の部会に分れて、終日熱心な討議が行なわれた。

大学図書館の部会は、広島大学会館を会場として開かれたが、午前中は共通テーマ「大学図書館改革の基本問題」をめぐり、国立・私立から報告があり、討論が行なわれた。午後は「図書館業務の機械化」の問題について、報告・討論があり、その他沖縄の大学図書館に対する本土大学図書館の協力の要請（琉球大学）や、アメリカにおける大学図書館の問題点について、ハワイ大学の鈴木幸久氏より報告があった。

第3日目は、各部会での討議のうち、諸方面に要望すべき事項を全体会議で討議し、7項目の要望が採択されて大会を終了した。

 ニ ュ ー ス

附属図書館に“業務機械化作業グループ”を設置

さる8月中旬より開かれていた“フォートラン”の研修会が終ったので、このほど、これ

をもとにして、雑誌総合目録をコンピューターにのせるべく、実験作業を実際に行なうため、“業務機械化作業グループ”が本館に設けられた。

同グループは研修に参加した本館の職員6名で構成され、自然科学欧文篇の一部を計算機で編集するためのプログラムを作成して、デバッグし、問題点を検討し、本年3月をメドに一応の結論をだすことをめざしている。また、さらに本館受入雑誌の管理についても検討する予定である。

なお、機械化にはその前提として、標準化が重要な問題であり、今後各部局側との連絡調整が必要になってくる。

資料紹介

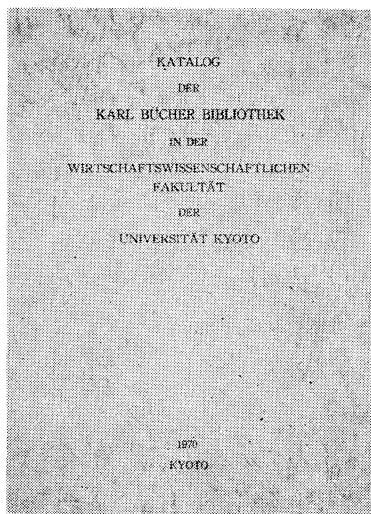
○カール・ビューヒャー文庫目録、京都大学経済学部同文庫目録作成委員会編。1970年3月刊。330P.

本書は経済学部の所蔵する K. Bücher (1847～1930。ドイツ新歴史学派の経済学者) 文庫の目録である。この文庫が岩崎小弥太氏の手をへて本学部の蔵書となったのは、大正13年のことであるが、日本にはこの前後に、著名なドイツの経済学者の蔵書が相次いでもたらされている。第一次大戦終結にともなうドイツ経済の窮迫に帰因するものであろう。主要なものをあげると、メンガー文庫(一橋大学)、ゾンバルト文庫(大阪市立大学)、マイヤー文庫(本学部)などである。

ビューヒャー文庫の内容は経済学を中心とした社会科学全般におよぶことはいままでもないが、その主要な軸の一つは、ドイツを中心としたヨーロッパ諸国の経済史に関する文献であろう。各種の社会問題に関する広範な蒐書も見逃せない。通常のコレクションでは、とかく逸脱しがちなパンフレット、抜刷りの類も実に丹念に保存されている。長い教授生活中に贈られたと思われる博士論文の数は通常の図書館におけるそれを上回るのではあるまいか。「社会政策学会論集」100巻、「シュモラー年報」82巻、「国民経済・統計年報」129巻など、個人の蔵書としてまれにみる充実ぶりといえよう。

この蔵書目録は写真・序言・目次・凡例・分類表・本文・索引・あとがきより構成されている。本文(285頁)は分類順に排列されており、「京都大学法学部・経済学部欧文図書目録分類表」によっている。索引は各著作の記入語(多くは著者名。団体出版物等は書名)をアルファベット順に排列して作成した。巻頭の写真は最も年代の古い M. Luther の“Von Kauffshandlung und wucher (1524)”に、ビューヒャーの書簡、自作の統計表、および蔵書印を組み合わせたものである。

ビューヒャー文庫目録(表紙)



あとがき 本号は図書館員の声の特集号でしたが、静脩は隔月刊なので、“利用者の声”特集号(その一)とは4ヵ月間のへだたりができました。今後は特定テーマをめぐって、利用者・図書館員の声を、同一号に同時に載せるような企画を立ててみたいと考えています。1971年の初めにあたり、紙面充実のための諸兄姉のご鞭撻を期待いたします。

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 7, No. 5 (通号38号) 1971年1月15日発行・編集発行人：岩猿敏生 発行所：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表771-8111(内線)2220-2238